

有明海で天然採苗された地ガキの地域ブランド化

有明海・八代海漁場環境研究センター 塚本 達也・松山 幸彦

見直される地ガキ

我が国のマガキ養殖は、宮城県と広島県の2大産地と各地方の小規模産地から構成されています。また、小規模産地で用いられる種苗の多くは、この2大産地から供給される稚貝を購入して養殖に用いるのが一般的です。しかし、それらの産地の天然採苗が不良だった場合、種苗の購入価格が高騰し、充分量を確保することが困難になります。そこで当センターでは、2018年度から3年計画で農研機構生研支援センターのイノベーション創出強化研究推進事業「地場種苗・健康診断・経営戦略でピンチをチャンスにかえるマガキ養殖システムの確立」に参画し、地方の小規模産地でのカキ養殖の安定化を目指しています。具体的には、『各地方の地場で天然採苗されたカキ（地ガキ）を養殖用の種苗として活用できないか?』、さらには『地場の種苗を用いることで、地域環境に適応し、味や形も変化に富んだカキを生産できないか?』等の可能性を評価する取り組みを行っています。現在、当センターでは、本事業の協力機関である小長井町漁業協同組合の協力を得ながら「有明海域における地場種苗を活かしたマガキ養殖の実践」と題して有明海での天然採苗試験や採苗された種苗を用いた「地ガキ」の垂下養殖試験に取り組んでいますのでご紹介します。

有明海での地ガキ生産試験

2018年から有明海で地ガキの天然採苗試験を実施するとともに、沖筏での垂下養殖試験に取り組んで来ました。これらの試験により、有明海では5月から10月頃までの長期間にわたり天然採苗が可能であることを確認しました。また、一般的に採苗に用いる付着器材にはホタテガイの貝殻を用いますが、その貝殻を模して製品化されたプラスチック製付着器の「クペル」にも有明海の地ガキは安定して付着することを確認しました。一方、網カゴに收容して干潟に設置したり潮間帯に垂下したりしたカキ殻粉末や軽石を素材とする粒状の付着器材は、摩擦したり泥が器材を覆ったりして採苗が不安定でした。これは、濁りや海底泥の巻き上げが強い有明海では盤状の付着器材がカキの採苗に向いていることを示唆しています。また、クペルは付着した種苗を剥がすことも容易なことから、有明海での一粒カキ用の種苗採集に向いていると思われました。一方、2018年の晩秋からは、小長井町漁業協同組合が管理する筏をお借りして垂下養殖試験を開始し、地ガキの一粒カキの生産に取り組みました。晩秋から春にかけての半年程度の試験でしたが、開始時に数センチだった地ガキは順調に成長し、大きいものでは商品サイズに近い殻高6cm程度にまで成長しました。また、その地ガキの貝殻は、他産地のものと大きく形が異なり、円盤状のものが多く出現しました(写真1)。こ

のように、有明海産地ガキの貝殻の形が他産地と容易に区別できれば、その特徴を活かしたブランドカキとして市場で高く評価されるのではないかと考えました。

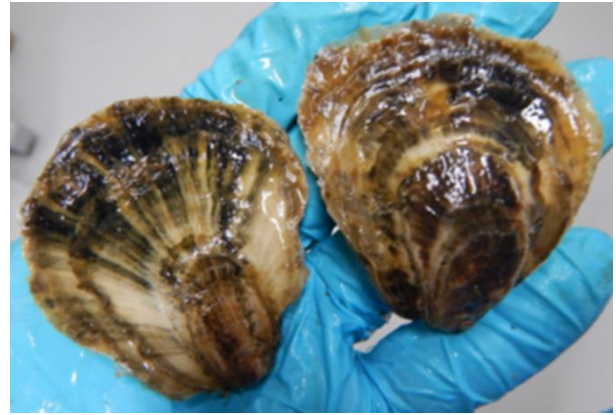


写真1 有明海で採苗され、垂下養殖により成長したカキ

シーフードショーへの出展

2019年8月に第21回ジャパンインターナショナルシーフードショーが東京ビックサイトで開催されました。我々が参画する研究プロジェクトチームも「地場種苗を活かしたマガキ養殖のススメ」と題して、伊勢湾・雄勝湾、瀬戸内海そして有明海で試験生産された各地ガキの標本展示を行い(写真2、トレイ左から上記産地の順で展示)、我々も有明海産地ガキの特徴と将来の可能性を来場者にアピールしました。東北地方や瀬戸内海のカキ養殖関係者にも、その円形の貝殻に注目してもらうことができました。また、一粒ガキとしてオイスターバー等に出荷すれば、その特徴から他産地との差別化が図りやすいとのコメントも参加者からいただきました。今後は、有明海沿岸のカキ養殖業者に地ガキの特徴と可能性を知ってもらい、現場での生産と販売に繋げて行くことを目指したいと思います。地場採苗による有明海産地ガキの養殖が地元で普及すれば、有明海のカキ養殖が多様化し、生産の安定化にも繋がるだろうと考えています。



写真2 シーフードショーでの展示ブース